

シナリオの創造

新藤兼人

日本映画界の名匠が

シナリオ創作の深淵を明かす

珠玉のシナリオ講話集!!



映人社

シナリオ文

102

シナリオの創造

定価 850円

昭和56年 6 月20日 初版発行

1981©

著 者 新 藤 兼 人

発行人 松 本 孝 二

発行所 株式会社 映 人 社

〒170 東京都豊島区東池袋5-32-10

T E L 03 - 585 - 0965

I S B N 4 - 87100 - 102 - 4 C0274 ¥ 850E

落丁・乱丁はお取替えいたします。

シナリオの創造

新藤兼人



映人社

目次

講演

私の仕事Ⅰ（NHK文化講演会）	5
私の仕事Ⅱ（シナリオ作家協会・昭和55年秋期講座）	29
私の仕事Ⅲ（シナリオ作家協会・昭和56年春期講座）	47
私とは何か―映画と文学（短歌雑誌「未来」安芸宮島大会）	69

対談

今村昌平 徒党を組め	113
井手雅人 書くこと・生きること・想うこと	151
馬場 当 いま、何をなすべきか	173
ジェームス三木 テレビの脚本・映画の脚本	197

昭和55年 NHK文化講演会より

私の仕事（I）

今、紹介にあずかりました新藤でございます。私は、シナリオライターでありますし、映画監督でありまして、あまりこういうところで話をするのに適当な人間ではないと思うのですけれど、「おまえのやっている仕事で何か話せ」と言われますと、私にも一つの考えがあります。て何かやっているわけですから、そのことについて話さないわけにはいかないので、そういうふうな考え方で今日やってきました。ですから、私が、日常仕事をしている中で、こういうふうにして私は考えてやっているんだというようなことを、これからちよっとお話してみたいというふうに思います。

私は、明治四十五年に生まれましたから、今、六十七歳です。もう少ししたら六十八歳になります。それから仕事の方は昭和十年に書き始めていますから、だいたい四十五年ほどこの仕事をやっているわけです。だからかなり長くやっていくたびれてもいるわけなんですけれど、あまりくたびれているわけにもいかないので、常に新人のつもりでどうやるか、ということとを心掛けているわけなんですけれど。

私は一年に一回か二年に一回ぐらい映画の監督をやっているんですけど、監督をやっている以外は何かをやっているかといえますと、シナリオを書いているわけです。映画の脚本ですね、テレビも書きますけれど。

それで仕事はどういうふうに行っているかと言いますと、楽な姿勢で物を書く、というのがいちばんいい考えが出るんじゃないかというようなことで、いちばん楽な姿勢で仕事をしているわけです。それはどういう姿勢かと言いますと、浴衣を着まして軽く帯を結ぶ、腹をあまり締めつけないようにし、肩も凝らないというふうにするわけなんです。それで夏も冬もこの浴衣を着てやっているわけなんです、冬になりますとちょっと寒いので、その上に半てんを掛けるわけです。

それで一日の仕事は、朝おきまして食事をしますとすぐ仕事にとりかかる、それから夕方ま

で詰めてやる、自分自身に没頭しやすいようにする、夕方ぶつとりときり、夜はやらない、これをくり返しているわけです。これはどういうことかといいますと、つまりドラマを作るわけですから、氣力が充実してないと、なかなか自分の思うような人物を書くわけにいかないということです、一番自分の氣力を、うまく發揮できるようなやり方、時間のとり方、それから環境、というようなことを実行しているわけです。今、冬なんです、やっぱり浴衣を着て、半てんをひっかけているわけなんです。この半てんというのは、これは私が子供の時に私のお母さんが作ってくれたものです。久留米絣の着物はその後いろんな形に仕立てなおして、とうとう半てんにし、着てるわけなんです。私の仕事というのは、つねに何かを考えて、何かを一つ作り出したいと思いつづけているのですから、人いちばい物にこだわるという性質があるわけなんです。一つの事をとり上げ、それに長くこだわっていると、私の心の中で、それが育ってきて暖まり、ある一人の人物ができたり、一つのドラマができたりするわけなんです。それは一年かかってできることもあるし、十年もかかってやっとできたりする場合もあるんですけれど、だから物にこだわるという性格になってしまふのです。

それで、その半てんのことなんですけれど、これは私が十歳ぐらいのころ、母がこしらえてくれた久留米絣の着物なんです。その着物は少年の着物ですから、つつっぱの袖なんです。私

が十五の時に母が死にしましたものですから、（母は私に）袖のヒミツは言わなかったのです。母が死んだころ私の家が倒産しまして、非常に貧しい生活をしなきゃならない事になりました、その着物をつつぽのまましばらく着ていたのですが、青年になっても、着物を買うことができなくて、困っているときに、兄の嫁が、その着物に袂が縫いこんであるのを発見したわけです。それでつつぽから袂が縫いこんであるのを出して、大人が着れる着物にしたわけなんです。母は死ぬ時に、つつぽの袖には袂が縫いこんであるからいずれ出して着たらいいいなんてことはいわなかったんですね。私が十五の時、死ぬとは思わなかったんでしょう。いずれそのうち袂を出してやろうと思っていたんだらうと思います。それから三十ぐらいになりますと、もう裾などひどくすり切れてしましまして、裏がえしにしまして着たわけですね。そのうちに四十ぐらいになりまして、裏がえしにした着物がまたすり切れて、これを一枚の衿にしたわけなんです。四十ぐらいになりました時には、ちょっと収入もあるようになりましたから、着物を買うことができたわけなんですけれど、母が私にだまって袂を縫いこんでいた、ということが、私の心の中でひっかかる問題として残っていたものですから、大事に衿にして着たんです。それから、又、十年ぐらいたちまして、五十ぐらになりますと、その衿がまたすり切れてしまいました。それで私が仕事をしている宿屋のおかみさんが「新藤さん、これは半てんに

「したらいいんじゃないか」と言います。私がまだ何とか着る方法があるんじゃないかといったもんですから、それであちこちすり切れたものをよせ集めて、半てんにしてくれたわけなんです。それで今、私は着ているんです。それは、お母さんにいろいろな面倒をかけて報いることができなかったから、お母さんのことを忘れずにいたいという気もちが一つと、長く一つのことにとだわりたいというふうな私の職業からくる生業なりわい、その両方からこれを長く着ているわけなんです。かなり、あちこちすり切れてきましたけれど、私はこれを執拗にとだわって死ぬまで着てやろうと思っているわけです。それから、これを着ていると、六十年も着ていますと、体の一部のような気がし、不思議な愛着がおきてきまして、これはもう着物なんていうものじゃなくて、友人みたいな気持ちになってきまして、壁にかけたりなんかしますと、ああ、まだ居るな、という感じがするんですね。

お母さんというのは、死んだ時にはそうではなかったんですけれど、だんだん時間がたってくるとたまらなくいいもので、たまにこの着物を見たりすると、急にお母さんのことを思い出したりしていい気持ちになるんですね。それから、これが長いこと私といっしょに仕事をしてきたということです。私は私自身だけをたのんで仕事をやってきたという自信とそれから信念がありますから、この味方がそばにいと運がいいような気もするんですね。運だけでは人

生は渡れないですが、そういうふうな感じになれるということは幸せですね。まもなく私は、いや、そのうち死ぬと思いますけど、この半てんは私が死んでも残ると思うんですね。そうしますと、私の息子や娘は、なんでこんなぼろの半てんを着ていたんだろうなどと思うんじゃないかと思うんですが、そういうことでいいんだと思います。子供と私のつながりは、私と子供の関係であって、生きた人間と人間との、新たに親子の関係を生じるのであって、私のお母さんの思いのこもった半てんは私の子には関係ないと思うんです。人と人とのつながりをそういうふうに思います。だから私とお母さんにとっては、抜き差しならないぬくもりの半てんですが、このぬくもりは子供には伝わらないぬくもりなんです。

私のお父さんはどんな人だったかと言いますと、父のことを話せば私の家のことを話すことになりますけれど、私の仕事を話すということは、私の家のことを話すということにもなるんです。最近、「父と私」という短いものを書く機会があって、お父さんは私に何をいつてくれたかと思ひ出そうとすると、もうほとんど私に何も言ってくれなかったという気がするんです。私の家は、私が十歳ぐらいの時に倒産しました。かなり大きな百姓をやっていたんですけれど、倒産して親子兄弟バラバラになってしまいました。大正の中ごろです。その父というのがまったく茫洋とした人で、昔は通信簿といったんですけれど、それを持って帰っても、よかった

とか悪かったとかもいわないし、それから叱られたこともないし、何か子供の機嫌をとるようなことをいってくれたこともないんですね。そうしますと、私の父というのは私に何もいってくれなかったんじゃないかと思うんですね。父というのは私に非常に大きな存在としてあるんですね。それは私が生まれるためには父という存在がなくては生まれないというようなことではなくて、もっと何か私と父がたくさんの対話を交しているように思うんですね。言葉は何も覚えていないし、父が私に何をいってくれたかも覚えていないんですが、非常にたくさんの対話をしたように思うんですね。

私は親子には対話が必要だということを最近いっているんですけど、人間と人間との関係というのは、対話に始まり対話に終わるんじゃないかと思うんです。つまり理の通った対話も大事だと思うんですが、それだけでなく、目に見えない沈黙の対話が大きく人間を動かすんだなと感じているんです。

私の代表作の一つに「裸の島」という映画があるんです。これは、どういう映画かといいますと、瀬戸内海の島に親と子供二人、四人家族がいて、自然の苛酷な条件とたたかいながら生活していくという話なんです。何でもなし話なんですけれど、私の代表作だと思っているんです。この島には水がない、水のある島から肥桶こえだで水を担いで持ってきたり、乾いた大地に

水をかけるんです。その乾いた大地というのは私の心でして、私の心に水をかけたい、水をかけたという考えがあってこの映画を作ったんです。どういうわけで、そういう発想をもったかというと、私は広島島の海に近い所に生まれたのでそういう島を見ているんですけど、小さい島に、父と母と子供二人ではなかなか住めないと思うんですが、これは私の心の中で生まれた風景でして、人間生活の縮図を端的に見るとこんな風になるんじゃないかということ、こういう設定を作ったんです。人間というのは希望と絶望が紙一重であって、そのどっちにも足を踏み入れているんだという考えから、希望と絶望の中の人間の生きる勇気を書いてみたいと思った映画です。これを思いつきましたのは、私が百姓の家に生まれたからです。私の家では秋になって穫り入れが終わりますと、前に広い田んぼがあるんですが、稲の切株を起こして麦をまくために畑に耕すわけです。今は耕運機というのがありまして、さっと耕すことができるんですが、昔はなかなかそうはいかない、一株一株起こしていくという作業をしていたんです。これは男の労力を使わないで女がやることになっていったんです。目もくらむような広い田んぼに何千株、何万株とある株を、私の母が炊事をしたり子供の面倒を見たりする暇に田んぼに出ては、ちょっとちょっと起こす、かと思うと又家へ帰っては炊事をしてる、又思い出したように行っっては一株一株起こすというふうに行っているうちに、広い田んぼの株を全部起こしてしまう

のです。それは目もくらむほど広い田んぼで、それをいつか知らないうちに向こうまで耕して株を起こし、作業を終わるということをやっているんです。

私のお母さんはこんなエネルギーをもっていったんだ、虫みたいにこつこつ動いている人間がこんなすばらしいエネルギーを持っているのかということをお母さんになってわかったのです。その時はわからなかった。そうした気もちを映画にしたいと思ってやっただけです。お母さんは田んぼに出ていきまして、私はこれから株を起こしていくんだ、これは生きるためにやらなきゃならないんであって、とかなんとか、理屈をいうわけではないし、それから向こうへ到達した時に、私はこれほど大きな仕事をしたんだ、こんな大きな田んぼを耕したんだ、という感想を述べるわけでもないんですね、私たちに百姓はたいへんな仕事だということさえいわなかったんです。だけど、自分の生き方、自分の人生というものは、こういう自然の中でこういう田んぼをこなしていくんだ、と無言でいっていたんですね。それが私にはすばらしいんです。今は、何かやりますと、まだやらない前から意見を発表したり、何かやりますと、誰も誉めないうちに、私はこんなことをしたんですがどうでしょうと自慢したりするんだけど、時代も違いますけど、私のお母さんはそうじゃないんです。黙って誰が見ようと見まいと田んぼの株を一株一株起こして目もくらむような広い田んぼに向こうへ到達したんです。私は、お母さ

んを誇りたい気持ちがあるんです。私のお母さんはこういうふうだったと誇りたい気持ちがあるんです。お母さんが死んで、私が四十五歳を越えたころやっとお母さんの気持ちがあったのです。

子供というのは母親をなつかしく思うものですが、ある風景を一つ話しますと、家の倒産騒ぎの時だったと思うんですが、広島なので近所に名高い厳島というのがあります、そこへ近所の人たちと行ったのです。私は七、八歳だったと思うんですが、厳島に巡航船から降りますと、そこにたくさんのみやげ物屋さんがありまして、私はおもちゃを買うようにせがむわけです。倒産騒ぎの中でおもちゃを買うお金もなかったのか、帰りに買おうとお母さんがいうもんだから、私は帰りに買うと言ってごまかされたことを覚えてるので、どうしてもこの場で買わさなければいけないと思うわけです。私はその地べたにひっくりかえって足をバタバタさせたりして買えという、そうすれば衆人監視の中であばれば、みっともないと思って親が折れて買うんじゃないかというふうなことを知っているわけです。私は末の子なのでわがままいっぱいに育てられたもんだから母を困らせてばかりいたんです。しかしお母さんはどうしたわけか、なかなか買わない、私はもう暴れまくり、お母さんを蹴ったり殴ったりしたわけです。お母さんは、ほんとうに、おもちゃを買う金を持っていなかったんだと思います。それは私の

氣もちに永いこと残りました。今も母親のことを思い出す時に、その場面を思い出すんです。そして私に、一株ずつ田んぼを起こす母親を発見させたのはそれがもとなんです。私が母親を蹴ったという痛みが、母親が株を起こしたという何でもない偉さを発見させたものなんです。親というのは子供を育てる義務があると思うんです。みんな順ぐりにそうやってきたんだから育てます。子供はただの生きものから人間に育っていく中では、劣情の塊りみたいなもので、人間形成していく中では、あちこち欠点だらけのものだと思うんです。それがだんだん修正されていくわけなんですけど、それは親が責任をもってやるんだと思うんです。私は子供については絶対に親に責任があると思っています。私がいくら蹴ろうと殴ろうと、笑っていました。子供にはいくら蹴られてもいいんだ、蹴ってくれ蹴ってくれという感じなんです。にこにこしているんです。帰りに買おう、あとで買おうといっているんです。人が見ているからといって、深刻な顔をして私をぶったりはしない、それはお母さんだからなんです。それがいま私はたまらないんです。そうすると子供は親を蹴るのが一番いいんじゃないか、ということになるかもしれません。そうじゃない……。

私はこういう当り前の子供の当り前の悪さをいっぱい持って育ちまして、母親が早く死んだ